

フルートと管弦楽の ための協奏曲

W.A. モーツァルト

Konzerte für Flöte und Orchester
Wolfgang Amadeus Mozart

◆◆第5回

講師・有田正広



*注1/ミュゼットは17~18世紀のフランスで流行したバッグ・パイプの一種。普通のバッグ・パイプは管を口にくわえてバッグに空気を入れるが、当時の宮廷では女性が人前で物を口にくわえるのははしたないとされていたので、腕に括り付けた小さな「ふいご」を使ってバッグに空気を送るようにしたもの。バッグ・パイプは短い休符を演奏することが出来ないため、同音が連続するときはその音を区切るため、音と音の間に前打音に似たごく短い2度以上離れた上の音を挿入して演奏するという奏法があり、これがAccentと呼ばれる装飾音になった。したがって、当時は前打音が付けられた同音程の音符が連続する場合は、必ず前打音を短く演奏するという習慣があった。

今回はフルート協奏曲 ニ長調 KV 314 第1楽章の第2主題からです。

①78小節から79小節にある3つのEの音の2つ目と3つ目の音にFisの前打音が付いています。この様に同音が続く所に付けられた前打音は、例外な

く短く演奏されなければなりません。これは「ミュゼット (Musette) *注1」と呼ばれる楽器の奏法からきた装飾音です。よく見られる、最初の前打音を長く、2つ目の前打音を短く演奏するという方法は非常に現代的な演奏解釈

であって、18世紀の音楽の解釈には適用できません。これは153小節にも出てきます。

64小節の1拍目にある前打音のことを前回説明しましたが、これは136小節も同じで、前打音を2分音符、解決音を4分音符にすることも可能です。(クヴァンツやL.モーツァルトはこの方法を主張しています)

②85小節の2拍目裏から3拍目にかけてのEのオクターヴのスラーがあり、これはハプスブルク家のパート譜(以下H.Mus.)にも付けられているものですが、大変に演奏効果の上がるスラーです。前回の60小節の説明にも出てきましたが、18世紀の音楽は伝統習慣として、順次進行が最も自然な音の流れと考えられていました。隣り合った音の跳躍の幅が大きくなればなるほど、そこには特別な音の関係や断絶があるとされていたので、作曲家が大きな跳躍にスラーを掛けるということは大変特殊なことで、そこにはなんらかの特別な表現を求めていたからだと考えられます。160小節にもこのオクターヴのスラーが出てきます。③これは、その直前の83小節の3拍から4拍目のスラーにも言えることです。

④107と110小節の1・2拍の音にBÄRENREITER版にはスラーが付いていて、H.Mus.にもHENLE版にも付いていません。オーボエ協奏曲の楽譜に付いているので、おそらくBÄRENREITERはこれを採用したのだと思いますが、これは問題視していいでしょう。

④ BÄRENREITER版



HENLE版



オーボエ協奏曲 (HENLE版)



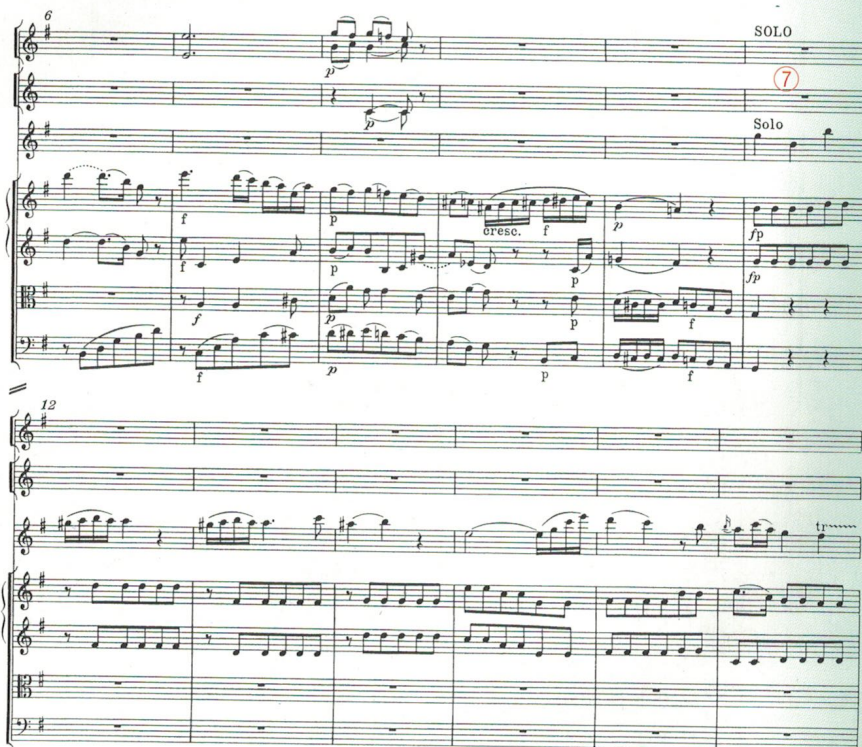
ルトは第1・第2ヴァイオリンに8分休符を置いて倚音の表情を十分に聴かせるように書いています。12・13と14小節で3回倚音が出てきて、これは3回目の倚音のゼクエンツということになります。倚音は比較的には、解決音より表情豊かに強く演奏されますが、ここでは12・13小節の2つのGisの倚音

に対して3つ目のAisは変化を付けて演奏すると良いでしょう。例えば、1・2回に対して3回目は少し大きめに演奏する。または、2回目を少し強く演奏し、3回目は逆に弱くして更にpで解決させる。個人的には後の方法の方が演奏の表現力が出るのではないかと感じています。

⑤ 147小節にあるスラーもイレギュラーなものです。16分音符の半音階で上昇し、行き着いた上のDまでスラーが掛かっています。18世紀には普通、行き着いた上の音はタンギングをするという規則がありますが、ここでは行き着いた音までスラーが掛かっている。しかも、この半音階を当時の楽器で演奏するという事は、音程・運指、両方とも大変難しいのです。音楽的にも半音階は修辞法の「苦難の歩み (passus duriusculus)」に相当するので、ここは軽く吹き飛ばすのではなくて、非常に難しそうに、そして行き着いたオクターブ上のDの音は解決音ですが、同時にさらにやかに演奏するようにして下さい。

⑥ 第2楽章でまず気をつけなければならないのは、冒頭の指示がAdagio ma non troppoだということです。旧モーツァルト全集ではこれがAndante ma non troppoとなっていたので、BÄRENREITERやHENLEなどを除く多くの出版社の楽譜が“Andante”と表記されています。しかし、この音楽の持つ雰囲気から、足早に過ぎ去るような軽快なAndanteの8分音符の刻みは避けて、ゆったりとした表情豊かな感覚で演奏するようにしましょう。

オーケストラで提示されるテーマG-D-Hの音が、11小節でフルートに現れると、3拍目のHの音はオクターブ上げられています。⑦ この3拍目は、修辞法のGedankenfigur (思考のあや) に相当し、その後のGisの倚音で、オーケストラの伴奏は8分休符になっているので、表情豊かな倚音を聴かせるようにしましょう。13小節の2度目のGisの倚音の後、14小節にはもう1度Aisの倚音があり、ここでもモーツァ



オーボエ協奏曲 (HENLE版)

打音ではないかと思われます。ちなみに、オーボエ協奏曲の楽譜には、この前打音は付いていません。モーツァルトの他の様々な曲を見ても、このような前打音が何度も繰り返し付けられるということはめったに無いことで、これに対してはかなり懐疑的にならざるを得ません。どうするかは各奏者の判断に委ねられるところです。

⑩ 22小節の3拍目にもオクターブのスラーが出てきます。これも大変イレギュラーなスラーですので、ファルセットあるいは18から19世紀初頭に言われていたポルタメント奏法(誌上レッスン48、49と58回=ライネッケ「ウンディーネ」/シューベルト「しほめる花」参照)を考えると良いでしょう。現代のフルートでも可能だと思いますが、唇で倍音を使って上に乗せるように吹くのも一つの方法ですし、当時のフルートではこれは非常に楽に出来ますので、ファルセットあるいは倍音で出せるように指使いや表現を考えると良いでしょう。もちろんそれを普通の指使いに置き換えて演奏することも出来ます。

⑪ 28小節目からは、オーケストラに対するフルートの対話的なオブリガートが出てきますが、ここにある *tr* はプラルトリラーなので補助音から演奏しなくても構いませんし、もちろん補助音から始めても構いません。

⑫ フルートのメロディーが32小節の半音階のシンコペーションで降りてきて、Fisがタイで結ばれ、二長調の解決音に向かって倚音で入っていきませんが、それがもう一度36小節目で反復されています。⑬そして37小節の1拍目のチェロとコントラバスで演奏されるGの音に対するフルートのAisは非常に表情豊かな倚音です。この音に向かって、その前のシンコペーションは美しく *diminuendo* され37小節のAisの音を飾るように、しかしそこであまり強い音ではなく、優しくHの音に入りましょう。

オーケストラが最初のテーマが出る序奏の部分から入ってきて、フルートのソロになったときには、フルートと第1・第2ヴァイオリンの高音域だけで演奏されますが、⑧ 18小節目で弦楽器総てのユニゾンでト長調からホ短調へ急激な転調をします。19小節目のフ

ルートの開始音のHは非常にデモーニッシュに演奏しましょう。

⑨ 前回にも触れましたが、ここではモーツァルトにはまず考えられない3つの複前打音が付けられています。これはH.Mus.に書き込まれているものですが、おそらく演奏者が編み出した前

そこは第2ヴァイオリンがDからDisに変わり、その後すぐにEとなることでホ短調のハーモニーが用意されているからです。フルートは、この音の移ろいを十分に感じ取って演奏しましょう。

⑭54・55小節は冒頭の5・6小節に相当する部分で、その導入として53小節が用意されています。フルートは53から54小節に向かって繊細にdiminuendoして、ト長調の属7のハーモニーのCに入ると良いでしょう。ヴァイオリンがユニゾンでフルートを飾りますが、ここではヴァイオリンもフルートもdiminuendoして緊張感を作ります。

⑮この後、オーケストラが56小節の1拍目でfpでハ長調の7のハーモニーを驚きを持って演奏します。そしてその後、フルートとヴァイオリンのみで、非常に繊細な低い音域のメロディーが出てきます。ここにはまた問題の複前打音が付いていますが、もしこの前打音を演奏するならば、あまり強烈に演奏するのではなく、優しく入って下さい。

⑯そして58小節目に減和音が用意されていますが、当時のフルートではこのGisの音は非常にに出にくい音で、殆ど聴こえません。これを演奏するわけですから、ここは当然ppです。⑰59小節でファルセットで上に浮いたかのように持ち上げて、次の小節でまた減和音が用意されるという具合に、ここはそれぞれの小節が素晴らしい表情の変化を見せるように書いてあります。

⑱最後に72小節の1拍目のフルートの3連音符と、その下で合わせるヴァイオリンの付点8分音符と16分音符の組合せのリズムをどう演奏するかという問題があります。1つの方法は、ヴァイオリンをフルートの3連音符に合わせて音価を2対1(ヴァイオリンも3連音符のリズムになる)にして演奏するというもので、第2の方法は楽譜通りフルートの3番目の音とヴァイオリンをずらせて演奏する方法です。18世紀の一般的な演奏法によれば前者に軍配が挙がりそうですが、この場合にもそれが当てはまるかどうか、疑問です。

では次回は3楽章です。



有田正広 (ありたまさひろ)
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師